「理解啓発について」の各委員からのご意見と

資料１

推進体制の見直しについて

**（１）第４回計画策定委員会での皆様からのご意見**

|  |
| --- |
| 清水博和委員（特定非営利活動法人船橋福祉相談協議会ふらっと船橋） |
| ・ソフト、ハードに関する障害特性に応じた暮らしにくさみたいなものはそれぞれすごく意見としては重いもの。  ・ソフト面における特性の理解としても、見守りとか、そっとしておいてほしいという視覚化しにくい部分の整理は、今後検討していく重要な事項であると考えている。  ・ハード面については公共交通機関、特に電車。視覚障害者の方の線路転落事故に対して、東武鉄道はホームドアがあるが、ほかの路線ではない。いろんな車両があるのでホームドアの設置が難しいと事務局から聞いているが、それでいいのかという疑問は抱えている。  ・資料記載のこれまでの取り組みだが、何を、どこに、どのような形で、いつ、情報提供、アナウンスされているのかという認識不足があると思っている。  ・ここのところ、駅で最近よく見るのが大きなポスターで「よっぱらったら、何してもいいの？」という掲示があるが、これはすごく自分自身の内部を問われるような掲示の仕方で、掲示の仕方もいろいろあるというのは感じている。  ・最後のページの取り組み例で書かれていることはとても重要だと思う。理解啓発についての会議体の設置によって、目に見えない内容だとか、掲示の仕方、伝え方といったことをいろんな方の意見を交えながら、いかに効率よく伝えていくのかを議論することはとても必要だと思っている。  ・現状、ガイドブックやハンドブックなどをつくっているが、どのように活用していくか。発信も合わせて考えないと、つくって終わってしまう、掲示して終わってしまう。こういったものも関係者が知らないと伝えていけない。 |

|  |
| --- |
| 住吉則子委員（特定非営利活動法人船橋こころの福祉協会船橋市地域活動支援センター） |
| ・今日皆さんの手元にOasis Calendar 2021を配っていただいた。これはオアシスの活動を当事者のみならず、いろんな方々に知っていただきたいということで、オアシスの利用者さんの作品でつくり始めて10年以上のカレンダーになる。  ・精神の方は、目で分からないために、障害をご理解いただけないことが多々ある。調査結果でも、精神の方には何をどうしていいか分からないので声をかけにくいとか、ご自身ですら自分の障害のことが理解できなくて悩んでいて、ほかの人にも理解してほしいと思わないというご意見があった。  ・精神の障害になられて10年、20年経っても、自分の病気のことが分からないというご本人、ご家族はいる。いろんな障害の症状や生活スタイルがあるが、皆さん生きづらさを抱えていて、基本的には自分のことを理解してほしいと常に感じられている。  ・ただ、理解してもらうには、どういう啓発をしたらいいのか。長年、支援する側が本人を擁護する支援のスタイルがあった。しかし、それでは障害を理解してもらうのは難しい。近年、ご本人が自分の障害の体験談、今の生活の話を支援者の研修会とか、あとは家族に対しても、直接自分の言葉でお話をして、理解を深めるという活動が少しずつ行われている。  ・オアシスではピアサポーターということで、当事者の皆さんが自分自身のお話をする機会を通して、少しずつ皆さんに障害を分かってもらえればということで取り組んでいる。少人数のイベントとか、看護学校の学生さんがオアシスに見学に来られて、お話を直接当事者とすると場面をつくっている。  ・地道にこつこつ少しずつ、皆さんに理解していただけるように当事者の方の力を借りて啓発する企画が今後は必要だと思っている。 |

|  |
| --- |
| 杉井和男委員（特定非営利活動法人船橋障害者自立生活センター） |
| 【事前提出資料】  　今から10年以上前のことだが、ある小学校（残念ながら船橋市ではありませんでしたが・・・）の総合学習の授業に参加した。「みんなの街」というテーマで、学校周辺の道路環境などを調べて、車椅子を使っている人たちにも住みやすい街にするにはどうすればよいかを子供たちが考える内容だった。「歩道橋にエレベーターをつける」など、真剣に考える姿が印象的だった。  　毎日の生活の中で、「差別」とは言えないまでも、不利益を感じる場面は数多くある。障害の定義が従来の「医療モデル」から「社会モデル」へと転換されてから長い年月が過ぎた。生活の中でどのような不利益があり、どのようなサポートを必要としているのかを知ることが本当の意味で「障害を理解する」ことだと思う。  　そのためには、いろいろな障害を持つ人たちの生活実態を知ってもらう機会を増やす必要があると考える。障害者週間の作品展には様々な作品が出品されるが、それらの作者がどんな支援を受けてどんな毎日を送っているのかは、作品を見ただけでは判断できない。障害者スポーツも同様だが、障害者の存在を知るためのきっかけとしては有効だと思うが、「障害を理解する」という視点からすると、ひと味足りないような気がする。  　広く一般市民の人たちに、社会モデルとしての障害を理解してもらうためには、いろいろな当事者や家族などが「生活を語る」場を設けることが必要だと思う。私が所属する団体でも折に触れてシンポジウム等を開催しているが、市や自立支援協議会の主催でそのようなイベントを定期的に開催してもいいし、障害の種類ごとに日常生活に即した形でのリーフレットを配布することなども有効だと思う。  　さまざまな取り組みを通して船橋市民の障害者に対する正しい理解が促進されることを期待している。  【会議当日のご意見】  ・資料にいろいろ書いたが、一言で言うと、障害を理解することは、何ができて、何ができないかを正しく理解することだと思う。  ・自分のことを言うと、例えば風邪をひいて、病院に行って、自分の症状を説明したときに、えっ、口がきけないんですねと言われたことがあった。本来、障害のことを一番正しく理解してくれているはずの医療関係者でさえそんな状態なので、一般市民の人が正しく理解できないのは当然だと思う。  ・完璧に正しく理解することは難しいかもしれないが、繰り返し説明をする必要がある。それは1つの団体では限界がある。市や自立支援協議会が主催で何かのイベントを考えるとか、そういうことを繰り返すことが大事だと思う。 |

|  |
| --- |
| 山田晴子委員（特定非営利活動法人ちばＭＤエコネット） |
| ・市民の方のアンケートを見ても、どうしていいか分からない、あるいは怖いとか、そういう声さえも聞こえる。それをどのように理解を推進するのか。やはり私が一番思うのは、偏見のない幼いころからの共同学習や交流学習。つまり、教育の力。その力は非常に大きいのではないかと思う。  ・支援する人、支援される人という関係以外の友人としてとか、あるいは市民同士、人としての関係というものが日常的にできること。それには本人と接すること、本人の話を聞く機会をもっとつくることではないか。  ・知的障害の人も適切なサポートがあれば、自分のことを自分の言葉で語ることができる。私の経験だが、県立高校の人権講演会に講師で年に1、2回招かれて、利用者さんの知的障害のある人や精神障害のある人と一緒に高校に行く。多少のサポートをしながら話をしてもらうと高校生は非常に真剣に聞いてくれる。なかなか聞き取りにくいところもあるが、本人の話を聞くよい機会になっている。  ・こうした機会を各団体や事業所が忙しい中でつくるのは非常に大変だが、全体のまとめの提案として、会議体の設置、市が事務局として入って会議体を設置するということは、大きな一歩ではないかと思う。その会議体の中で対象者をどうするとか、様々なことを一緒に考えることができる。  ・この会議体に2つ期待したいことがある。1つは市民に対する理解啓発をどうやっていくか。もう1つは、今度は市の職員内部のご理解をどう進めていくか。その両面でこの会議体が動いていけたらいいなと大変期待している。 |

|  |
| --- |
| 原亮司委員（公益財団法人船橋市福祉サービス公社） |
| ・船橋市福祉サービス公社では、児童向け福祉講座を開催している。今年度はコロナの影響で一度も開催がなかったが、市内の小中学校の児童を対象に、理解啓発のための講座を開催している。  ・現状、小中学校からの依頼があって初めて活動にお伺いできる形になっている。校長会などでお願いにお伺いしたことはあるが、なかなかオファーをいただけず、動けないのが現状である。  ・実際にオファーをいただいたときに、障害当事者団体などの方にご協力いただき、児童向けの講座を開催している。児童から上がる質問は本当に驚くような質問内容が多い。何を食べているんですかと質問する児童もいる。身の回りに実際に障害の方がいらっしゃらないと、そこまで理解ができない部分があると考えられるので、児童向けの機会はどんどん増やしていきたい。何とか取り組みを強化していきたい。  ・YouTubeなどでご自身の障害の話をされている当事者の方などが増えてきている。理解を深めていただくという点では非常に効果があると思う。 |

|  |
| --- |
| 池田則子委員（特定非営利活動法人ロンの家福祉会） |
| ・当会は3障害の方と関わっているが、余暇活動の中で特に知的障害者の方へのご理解を得る難しさを感じている。  ・お手元の資料の13ページに単独で取り組んでも、その効果が限定的になってしまう可能性がありますという部分があるが、当会で過去に行った行動でうれしかった、ありがたかった内容をここでお話をさせていただきたい。  　今年はコロナ禍で飲食店の活動を控えたが、以前は夏休みなどの長期休み前に、活動で使わせていただくファミリーレストランに必ずご挨拶に行っていた。初めての人や声が苦手の方を配慮して、広めの角の席をご用意してくださったり、ほかのお客様を少し離れた席に案内をしてくださったり、メニューの内容が変わってしまったにも関わらず、気に入ったメニューがないと不機嫌というか、ちょっと暴れ出しそうになったご利用者さんに今日は材料があるからご用意しますね、次はつくれないけどというような対応をしていただいたこともある。  　また、別のお店では取り皿が積み上げられていたのだが、何十枚というお皿を割ってしまったことがある。すぐに謝罪をしたが、障害者の特性をお話しさせていただく機会を設けていただいた。そのときの店長さんが会社に戻り、店長会議でこのお話をして、お皿の位置、高さなど、近隣の同じファミリーレストラン内では現在でも、そのご利用者さんの目につかないような形での配置をしてくださっている。  ・地域で生きていくために、身近にある飲食店や商業施設などを皮切りに、障害特性理解のためのパンフレットや話を聞いていただける場を設けることをここに盛り込んでいただけたらと思っている。 |

|  |
| --- |
| 泉一成委員（のまる） |
| ・私は日頃、知的障害の方々に接している。強度行動障害の方々も多く入所しているので、何でこんなことするんだろう、どうしてこういう考えがあるんだろうと、ともすると私たちが基準になるが、そうではなくて彼らや彼女たちの目線、考え方に沿った生き方をサポートしていかなければいけないと思っている。  ・今年3月にさざんか会の北総育成園で新型コロナの集団感染が起こったときに思ったことは、昨日まであれほど地域の中に仲良くしていた人たちに対して、ごみの回収はだめ、しません、お弁当は届けられませんとなり、どうやって生きていったらいいのかということ。とても悲しい思いをした。ところが、市立船橋高校でクラスターが起きたときに東船橋駅の周辺で、船橋の子供たち頑張れというポスターを市民の皆さんが掲示し始めている。これはすごいと思っている。  ・令和3年に県内の小学校4年生に千葉県教育委員会が子供の権利についてのパンフレットを配布する予定だが、山田委員がおっしゃったように、子供たちに障害があることをもっと理解してもらう授業を船橋モデルでやっていただきたい。授業の中で当事者の皆さんが、自分の体験、困っていること、助けてほしいこと、そして、子供たちに困ったときには、助けてと言っていいんだよといったことを授業の中で取り組んでいただきたい。  ・学校を巻き込んでいくことがとても大事なポイントだと思う。 |

|  |
| --- |
| 普久原佳代子委員（医療法人社団健仁会ひまわり苑） |
| ・私は精神障害の方の理解と取り組みというところで考えた。船橋の広報紙を見ても、テレビなどのメディアを見ても、精神障害というのは載せにくい、前に出にくい、分かりにくい障害なんだなと実感している。  ・知識も大切だが、早く知ってもらえる手段として、ご本人と市民が直接接する機会を設けることが大切。  ・既存のイベントだと、障害者の方と支援者、市が企画をして、一般市民に来てもらうという体制だと思う。まず、既存の例えば船橋市がバックアップしているスポーツ団体や一般市民の団体と直接イベントで接する機会をつくって、一般市民の方にこちらから近づいていくという方向性で、市民の疾病ヘの理解、特に精神の方は、病状が悪くなったらどうなるのかとか、事件を起こすのではないかという不安も一般の方にはあるかと思う。私たち支援者と行政の方、障害の方、生活支援課の方、保健所の方を巻き込んで、一緒にイベント、企画をつくっていければと思っている。 |

|  |
| --- |
| 鈴木章浩委員（社会福祉法人千葉県福祉援護会障害者支援施設誠光園） |
| 【事前提出資料】  ・日頃より、船橋市においては障害や障害のある人に一定の理解があると感じているが、アンケート結果を拝見し、まだまだ課題があることを実感した。  ・今後、団体が行う理解啓発活動を市にバックアップいただき、取り組みを進めることができれば、より効果的であると心強く思う。  ・私の所属する施設の地域では、近隣の小学校や中学校と交流を行っており、子どもたちは「わからない」ところから始まり、ご利用者との関わりを通して徐々に表情が和らぎ、触れ合う場面が増えるなど、理解が深まっていく様子が伝わる。このような場面からも「知る」ということがとても大切であると感じている。  ・資料にあるYouTubeを使った動画配信は今の情報社会に合っており、内容も素敵である。その他の取り組みにおいても、障害のある人が主役になり、当事者の声や活動等を発信し、知っていただく機会が増えていくことで理解も深まっていくと考える。  ・私たちも一層の参画意識をもって取り組んでいきたい。 |

|  |
| --- |
| 千日清委員（社会福祉法人大久保学園） |
| 【事前提出資料】  　知的分野で私的意見を  　身体、一部精神の障害を持つ方と比較すると知的障害児者への意識や理解は、捉えにくい、見えにくい部分が多々あるものと実感しています。  　障害者本人から援助介護を求めることも円滑にできず、同伴者（支援者や家族）に対する世間一般からの見方は、付き添っている人が何もしないのに、他人がどう援助すれば？と思われていることも多いと思います。  　障害特性を理解するにはとてつもなく時間もかかることでしょう。  　見守ってほしい、そっとしておいて欲しいという思いも、同伴支援者や家族から発信する必要もあると思います。  　何といってもどうしようもできない状況がある訳ですから。  　どうしても理解してくれない、わかってくれないと受け身での気持ちを言うだけでなく、こちらからどうして欲しいというアプローチをしていく必要もあると思います。  　ヘルプカードを障害者自身から示すことが出来るのであれば、それは大きな援助は不要です。  　カードを見せるという意識さえない方が多いのですから。  【会議当日のご意見】  ・障害特性について世間の皆さんの理解を深めていくのはとても重要なこと。  ・映像化された水泳の選手の方、支援学校を卒業する夢を語る方は感動的だが、これは障害があるなしに関わらず、あのような映像になると励ましたくなるし、応援したくなるほどの感動をする。私は今、知的障害のほうの分野で仕事しているが、そればかりではない。  ・ヘルプカードというものもあるが、ヘルプカードを出すという意識さえ持たず、全く何を訴えていっていいかが分からない方がたくさんいる。  ・強度行動障害や非常に自閉的な傾向が強い方たちを映像にして、特性はこうだと言うことは絶対できない。周囲から見たときに障害の表面化している方、内面的に見えない方にあっても、僕たちの捉え方で、この人困っていそうだなということについては、比較的手を出そうと考える。しかし、知的障害の場合は相手が何を困っているか分からないし、どのように対応していいか全く分からない。  ・私たちの法人は、このことを半世紀地域の中でやってきた。イベント、施設介護、地域活動に利用者と一緒に参画をした。  ・この間も、地域で障害があるであろう方が何かをしたのか、すぐに交番から警察官が来て、羽交い絞めで抑えられていた。周りのお子さんが大久保学園の生徒ではないのかということで警察に伝わって、僕たちのところに通報されてきた。施設の人ではなかったのだが、僕らでサポートした。こういったことを繰り返していくしかない。 |

|  |
| --- |
| 小松尚也委員（医療法人同和会千葉病院） |
| ・船橋の病院で働く医師なので、コロナ対策をかなりやっている。ただ、私は精神科医なので、コロナの対策というのは人に与える影響が大変甚大だと思っている。いっぱいあるが、1つだけ言うのであれば、自律神経の不活発。要するにコロナ対策というのは自粛活動で、これは引きこもれということである。引きこもるということは、動物としての活動が抑えられる。吠えるとか、走るとか、群れるとか、歌うとか、しゃべるとか、あるいは移動する、あるいは触るとか、アタッチメントとか。そういったことは全てだめになっている。様々な局面に、今後ボディブローみたいに効いてくる可能性があると思う。これは健常者の方も障害者の方も同じ。  交感神経が不活発になってくると、副交感神経が優位になる。副交感神経が優位になるといいかというと、そうではない。最近の理論では、副交感神経にはいい副交感神経と悪い副交感神経があると言われていて、悪い副交感神経が優位になってしまうと、本当に不活発からなかなか抜け出せなくなってしまう。たまに人前に出るとか、交感神経が賦活されるような場面になると極端に出てしまう。要はパニックになりやすいなどということが出てきてしまう。様々な問題が出てきて、それによって二次的に虐待、依存症、その他のことが出てくる可能性はあると思う。  ・コロナ対策をした後のメンタルヘルス対策がとても大事になると思っている。健常の方もだが、病症がある方にも様々な局面で目を配らなければいけない。理解啓発とは関係ないがコメントさせていただいた。 |

|  |
| --- |
| 赤井淳二委員（ららぽーと歯科） |
| ・船橋歯科医師会は今、さざんか歯科と、かざぐるま歯科という2つの診療所を運営させていただいており、いろんな障害を持つ患者さんと接している。その中で感じるのは、例えば自閉症をとっても、いろんな種類・症状があって、その患者さんの個性に合わせた診療というのが必要だということ。きめ細やかな診療が必要になってくる。  　我々もそれを理解しようとすると、私自身も最初は1つの疾病があると、大くくりでこの患者さんはこういう特性があると思ってしまうが、実際、患者さんに当たってみるといろんな個性があるということをつくづく感じている。特にご両親とか保護者とか、そういう人から得る情報というのは僕らよりずっとそのお子さんだったりの疾患の特性をよく理解なさっているので、僕らもそこで勉強させていただいているということが多くある。だから、我々もそれを通じて一般の診療の中でも細かな障害を持った患者さんもいらっしゃるので、広く受け入れるように会員に周知をしている。  ・我々もよく学校に出向いて健診を行うが、その中でも感じることは、学校教育の重要さ。虫歯がこれだけ減ってきたというのは、健康教育、保健教育の果たした役割が非常に大きい。学校の中でも僕らは啓発するわけだが、特別支援の子供たちを見ていても、インクルーシブ教育を受けても、教育の重要さというのは特に私自身は感じている。 |

|  |
| --- |
| 阿部義徳委員（船橋市教育委員会船橋市総合教育センター） |
| ・インクルーシブ教育システムの推進という点から、障害を持ったお子さんもない子も共に学ぶ場というところで、いろいろな整備をしている。  ・大きなところだと、例えばどの学校にも多目的トイレの設置、大規模改修に合わせたエレベーター設置、あとは手すりやスロープの設置。そういったものを充実していく。段階的だが、ニーズのあるところを見ながら、特別支援学級を設置していく。  ・人的支援としては、支援員。困った子にちょっと手助けしていただけるような支援員さんを配置したり、医療的ケアの必要なお子さんに対しては、看護師を配置している。  ・今後はパソコン、ICTの活用についても、障害を持ったお子さんにも少し援助できるようなことを今後進めていくだろうなと思っている。いろんな部分で、視覚的な部分で分かりやすくということもできるのかなと思っている。  ・支援学校の先生方からもあったが、一緒に学ぶ場面の中で交流及び共同学習ということで、いろんな部分で関われる環境を今後も少しずつだが整備していけるようにしていきたい。 |

|  |
| --- |
| 河村淑子委員（千葉県立船橋特別支援学校） |
| ・本校は、車椅子を使っているお子さんたち、肢体不自由のお子さんたち、しかも小学部のみの学校になる。資料5の13ページにもあるが、教育に携わる者として、本人や支援者の積極的な関与が必要だということを痛感している。  ・障害のあるお子さんたちを理解してもらえたと感じる内容を紹介させていただきたい。  　本校は、通級指導を実施している。障害理解のための授業という限られた回数ではあるが、聞こえの分野で実施している。補聴器を実際につける疑似体験も重要だが、障害を持つお子さんたちの訴え、聞こえにくさの説明、あるいは求める支援内容など、十分ではないかもしれないが、そのお子さんが自分の言葉で伝えていくことが大事だと思っている。伝えられる、聞いてくれる通常級のお子さんたちもそれを当人の言葉として受けとめていると感じる。  　成果としては、後ろから声をかけられることがなくなったとか、分かりやすいように大きく口を動かしてくれるようになったといった感想が上がるが、お子さん自身が障害を理解してもらうための授業をやってよかったということを残すのが、これから社会に出ていこう、分かってもらおうという意欲につながるという事例である。  ・もう1つ、交流のことについて。本校は近所の小学校と学校間の交流、あと、お子さんたちが住んでいる居住地での交流である居住地校交流の2つをやっている。居住地校交流は希望制なのだが、全校の3分の1の生徒の保護者の方が希望される。  　その中で、あいうえお表を使って1文字ずつ指差しで答える。それが難しいお子さんは、視線とか表情で意思表示をするようなことをくり返している。障害のあるお子さんたちの伝えたいという思いとそれを真剣に受けとめようとするお子さんたちの思いが、本当の意味で交流しているいう姿があって、お互いの理解につながっていると感じる。  ・私たち教師の関わりが交流先の子供たち、または交流先の先生方に大きな影響を与えていると感じる。私たちが障害を理解しているのか、その辺を深く考えながら、対応していくことも必要だと思っている。  ・言葉だけでなく、伝えられる子供を育てていく、これが私たち学校にとって大事な任務だと思っている。 |

|  |
| --- |
| 菊池亜希子委員（船橋市立船橋特別支援学校） |
| ・私たちは学校という立場で、障害、理解を広めていくために何ができるかを日ごろから考えている。生徒、児童同士の直接交流、間接交流といった直接子供たち同士が関われる機会を設けている。  　私は特別支援学級の担任をしていたこともあるが、学校に支援学級があると何となく自然に関わって、周りの子たちにも理解が深まっているとは思う。しかし、全ての学校に特別支援学級があるわけではないので、以前はこちらからお願いして交流させていただいていた。  　理解をしていただきたいと思ったときには、こちらから出向く形が多くなっている。そこが逆に、知りたいので教えてもらいたい、関われませんかと、こちらに依頼してもらえるような社会になってほしいと思っている。  ・本校では学校行事のときに中高生や一般のボランティアの方にもご協力いただいて、一緒に活動していただいている。そういった関係ができることから、少しずつ理解が広がっていっていると思っている。  ・堤委員がおっしゃられていたことが、本当に私がすごく思っていたことだった。「何かできることありますか」と伝えていただくことが、本当に大事なのではないかと思っている。「手伝いますとか」ではなく「何かできること」という、相手の方に寄り添うような言葉かけをしてもらえるような社会になってもらいたいと思っている。そういう関わり方が大事だということを私は関われる子供たちには伝えながら、社会としても他人のことを思いやることの大切さをもう一度考え直すような取り組みができるといいと願っているので、ぜひ船橋がそれを率先してやっていただけたらと思っている。 |

|  |
| --- |
| 小川洋委員（船橋公共職業安定所） |
| 【事前提出資料】  　ハローワークという立場なので、働く場面での障害のある人への理解について意見させていただく。  ①障害をお持ちの当事者について  　アンケートの回答の中で「障害のことを伝えずに、ようやく少しお仕事ができるようになったが、自分は正しいと思って話をしていた時、冷たい視線を感じた時があった」との回答がある。  　障害があることを伏せて（以下、クローズ）就職したケースと思われるが、ハローワークの窓口でも同様の就職を希望される方がいる。  　しかし、ハローワークの窓口ではクローズで働くことはあまりお勧めしていない。  　ハローワークで精神障害をお持ちの方で、ある一定期間（半年または一年）働き続けている方にアンケートを取った。  　クローズで働いている方に「クローズで働いていて満足していますか？」という質問をしたところ、「満足しています」と答えた方はわずか10％。90％の方は「クローズで働いていて不満足」という結果だった。  　逆に自身の障害を開示して（以下、オープン）働いている方に「オープンで働いていて満足していますか？」と質問したら、「満足しています」が90％、「オープンにしたことを後悔しています」が10％と真逆の結果が出た。  　また、障害者職業センターが、ハローワーク経由で就職した精神障害をお持ちの方の12か月後の職場定着率を調査したところ、「障害オープンで支援機関による定着支援あり」の方の定着率は70％、「障害オープンで、定着支援なし」の方の定着率は50％、「障害クローズ」の方の定着率は23％という結果が出ている。  　就職先で体調を維持し、職場に馴染み、仕事でパフォーマンスを発揮し、その結果として安定した収入を得続けていけるかどうかは、どれだけ自分をサポートしてもらえる態勢を作っていけるかにかかっている。  　少し厳しいことを言うが、クローズで就職しても良い会社にさえ入れれば「うまくいくはず」「できるはず」と思うのは残念ながら間違いである。  　そうした現実を当事者も受け止め、オープンにしていかなければ理解は進まないと考える。  ②障害者を雇用する（しなければならない）企業について  　障害者の法定雇用率（現在は2.2％、来年3月からは2.3％）があるので、多くの企業は障害または障害をお持ちの方を理解しようと努力しながら雇用している。しかし、残念ながらその努力の過程と結果にはまだまだ差異があるのが現実である。  　いまだにハローワークの窓口では、障害を理由とした差別や雇用の場面での合理的配慮の提供が不十分である事例が、年間複数件確認されている。  　こうした事案に関しては、ハローワークの雇用指導官がその企業を訪問し、事実関係の確認と必要な助言・指導を行い改善に向けた企業の取り組みを促している。  　また、近年、雇用者数が増加している「精神・発達障害者」への理解啓発の取り組みとして「しごとサポーター養成講座」を開催している。  　障害をお持ちの方が働いている職場では、当事者の直属の上司や人事担当者だけが理解していても働きやすい職場にはならない。そこで働くすべての人たちが、障害をお持ちの方を一緒に働く仲間として、その方の障害特性や配慮事項などを理解している必要がある。  　こうした講座はハローワークでの集合講座だけではなく、企業に出向いて社員研修として行う「出前講座」も実施している。  　こうした取り組みはハローワークだけでなく、様々な団体が行っていると思われるので、市はそうした取り組みを把握し、地域の企業や団体に発信するバックアップをしていただけると良いのではないかと思う。 |

|  |
| --- |
| 丸山恭平委員（船橋市社会福祉協議会） |
| ・障害や障害をお持ちの方に対する理解を深めるためには、様々な啓発活動や障害をお持ちの方がみずからイベントに参加されるということも大切。さらに、障害をお持ちの方とお持ちでない方が、同じ目的や空間、時間を共有するようなイベントで、ともに活動することで理解を深められる。そして、自然と障害への理解も深まると考えている。  ・アンケート、10ページの一番下に、地域活動支援センターのアーモさんのところで、「当事者と接してこそ啓発活動になるのでは」という一文があるが、私はまさにそのとおりだと思った。  ・11ページのアンケート、イベント参加ということもある。難しいところもあるかもしれないが、障害をお持ちの方から市で行っている、広く一般の市民を対象としているイベントなどにも参加できるような仕組みづくりをしていただくことが大切だと思った。  ・啓発活動については、早ければ早いほどいいと思う。幼少期、早い段階で始めることで、それが当たり前という理解につながる。  ・私ども社会福祉協議会のボランティアセンターでは、市内の小中学生を対象に、これは障害者に限ったことではないが、高齢者の方も含めて車椅子の体験とか、白杖の体験授業をやっている。そういったところで地道に広げていけばいいと思った。 |

|  |
| --- |
| 池田健委員（船橋市手をつなぐ育成会） |
| ・私は知的障害という障害の親の団体の立場でいわゆる理解啓蒙という点に関して個人的な見解を述べさせてもらう。  ・知的障害と言っても、千差万別。就職できるぐらいの軽度から、寝たきりの重度まである。県もそうだが、船橋市育成会の会員の方はほとんど重度である。資料にあるように、当事者みずからが情報発信をするということは非常に大切だと思うが正直できない。できないから親がかわってやってきている歴史が育成会の場合はある。  ・育成会の全国的な動きも含めて、昭和からやってきた結果として現在があって、私は国、県、市、行政の力というのに物すごく恩恵をいただいていると本当に感謝している。  ・生まれてきた子供が言葉を発せないとか、ちょっと言っていることを理解できないとか、こういったお子さんのことをグレーゾーンと言うのだが、昔であれば、こういったお子さんを持った親はまず世間に出さなかった。隠すことに専念するという時代だった。制度、環境がよくなり、進路の選択肢が非常に増えたので、グレーゾーンを持ったお母さん方が育成会に入ってくるようになった。  ・我々は知的障害を持った親たちに対する理解度とそれ以外の人に対する理解度の両方やらないといけないが、後のほうが抜けている。私としても今後市と一緒にいろいろ協働して、一般の人に対する理解度を深めることを何かやっていきたいと思っている。 |

|  |
| --- |
| 黒川晃委員（船橋市視覚障害者協会） |
| 【事前提出資料】  ・現在、船橋市視覚障害者協会では、市内小学校4年生を対象に会員が体験談をお話しする機会をいただいている。お話をした後には、質問コーナーを設けており、「どうやってお風呂に入るのか」「食事はどうしているのか」といった質問に体験を交えて答えている。  ・この取り組みは、各学校の要望を船橋市福祉サービス公社が取りまとめ、当会がそれを受けて学校に伺う形をとっている。しかし、現状はあくまで依頼があった学校に伺うものになっている。  ・今回の資料を見て、新型コロナウイルス感染症が終息した際には当会から働きかけ、現在つながりのないところでも新たに取り組みを行うことで理解啓発を進めていきたい。 |

|  |
| --- |
| 三浦みどり委員（船橋市聴覚障害者協会） |
| 【事前提出資料】  ・理解啓発動画はよい動画で聞こえない仲間を出していただき、感謝申し上げます。  ・船橋市聴覚障害者協会で手話サークル３団体と合同で聴こえない高齢者との交流の場を年に一度企画していたが、今年に入って新型コロナウイルス感染拡大のために、交流の場を設けることができていない。  ・今後、交流できる機会がないままだと、もともと生きるための言語である「手話」で接する時間が減ると脳の機能が衰えていく恐れがある。認知症の進行が早まるかもしれない。そうならないように声掛けをしたいが、コロナ禍で家に引きこもる方が増えている。大変難しいことでどうしたら手話で楽しい触れ合いができないものだろうか。実際、老人施設に入所されているろう高齢者がいらっしゃる。  聞こえる高齢者の方々の中にろう高齢者が一人で孤立している。手話でお話しできる人がいない。職員の方が手話ができていても、忙しい間にろう高齢者に付き添っているわけではない。一人でポツンとしているだけで、食事・風呂などは身振りで通じているようだが、本来の手話を使っての楽しい時間は取れにくいようである。聞こえない方だけの施設があったら、毎日楽しく過ごせるのではないか。  ・船橋市にも聴覚障害者専用の老人施設、また、一般の方々と触れ合えるイベント、趣味などの講座にも手話があって当たり前の雰囲気、自然に対応して頂けることを望む。 |

|  |
| --- |
| 布施千草委員（植草学園短期大学） |
| ・私は、皆さんのご意見を聞いて、やはり実践的にやられているし、今関わられている方たちのご意見はすごく必要だなという印象を受けた。  ・杉井委員がこちらのペーパーに起こされたことが、私は教育の現場の者として、ICFの考え方をしっかりとみんなが分かって、それで障害ということが、ただ単に身体的なところではなく、環境因子と個人因子のところのアプローチで、かなり皆さんと同等になれるというような事実をみんなが分かるような、ただ単に助けるというようなことではなくて、これがその人の地位をアップするというようなことを、福祉のお勉強をしたり、その世界にいる人間だけではなくて、みんなに行きわたるように、国際障害分類ではなくて、生活機能分類を明確に皆さんが持てたら少しいいのかなという印象を持った。  ・それから、お話をされたときに医療者すら分からないということを言われた。私自身も救急の看護師をやっていたときに、脳挫傷になった人が助かってよかったと思って、その後、学生として、今度は高次脳機能障害の方を受け持ったときに、その高次脳機能障害は、その彼は交通事故を起こして、脳挫傷をした結果として出てきた。それから生活困難性がすごく出ている。  ・でもそれは、可視化できないところがある。そういうことは、その人のライフスタイルをずっと見ていないと分からないところかもしれないということを感じていて、長期的な考え方をみんなが持てる、そのような何かがあったらいいなと思っている。 |

|  |
| --- |
| 戸塚法子委員（淑徳大学） |
| ・アンケートを読ませていただいて、イベント参加や情報発信、そして交流の場の重要性というのは、アンケートの結果のとおりとても必要なことだと思っている。しかしその場合、障害のある方々が伝えたい内容というのが、少しでも多くの市民の方々に伝わる、理解してもらわなければ、全く意味がない。  　そうなってくると、資料5のページ14にあるように、①だれを対象に、②どうすればとなるが、もともと理解をしている人たちが今後何を発信しても、一定程度の理解を確実にしてくれる。その方々は、何らかの形で接することができている層だと思われる。  　問題になってくるのは、理解を示さない、または無関心な層に対して、どこまで食い込めるかなのだと思う。そうした方々の理解啓発が進まないことで、心ない方の事件やトラブルが起きているというのもまた事実かと思われる。しかも、受け身的な理解、受動的な理解、一過性のみの理解、見せかけだけの理解といった域にとどまる働きかけだと、理解そのものの定着は長続きしない。  　障害のある方々に対する能動的な理解、積極的な理解の域の部分に達しなければならないとするならば、そして関心の薄い方々の層に対してどうアプローチすれば理解啓発が進むのか、そうした方々の目線でどうしてなのかという原因を含めて、今一度捉えなおすということが重要になってくると思われる。その目線が不足していると、いつまでも一定の理解層にしかメッセージが届かないということになってしまう。  　そうなると、14ページの④の効果性ということも違ってくると思う。無関心な方々、あるいは理解の薄い層の方々の目線から考えた理解と啓発というもの、そうしたアングルからの検討というのも、合わせて行う必要性というのを痛感した。  ・また、2番目として、障害のあるご本人が発する機会を与えるということだが、発信したい中身が必要に応じて取りやすいような一定のセキュリティー、ガードをかけて、教材を教育用として何かそういうマークのようなものがあると、遠隔授業を学校でもやっているさなか、ありがたいなと思った。  ・パワハラ、アカハラ、マタハラというハラスメントの研修ってたくさんあるが、障害への理解に対する研修というのをもう少し増やしていくといいかなと思った。  ・それから、アンケートの中にある、何をどうすればいいか分からない、理解したいためのアプローチ、様々なノウハウというのをもう少しいろいろな形で知る機会というのが充実化するといいのかなと思った。 |

|  |
| --- |
| 阿部朋子委員（公募委員） |
| ・調査を見て、障害への理解を深めたい人たちへの発信が十分できているように感じたが、身近に障害者がいない人たちに対しての発信は、まだ情報を届け切れていないと感じた。  ・健常者の多くは助けたいのに、どうやっていいか分からないと思っている方が多いと思う。具体的な支援方法を気軽に知る機会があれば、もっと自然に介助ができるのではないか。そのような人たちに向けて、先ほどの広報ふなばしにも載っていたように、それぞれの障害の簡潔な説明や困り事、それに対する具体的な支援方法が書かれた冊子のようなものがあれば、より分かりやすいのではないかと思った。  ・大切なのは、簡単に読めて実践的な内容にすること。できるだけ入り口のハードルを下げて、情報を多くの人に知ってもらうことがさらなる理解啓発につながる。  ・配布方法も、様々な世代に広まるように、公立中学とか高校とかに配布してもらったり、一般家庭にはこの広報のように、一緒にそういう小さい冊子を入れることで、様々な家庭や世代に、自然に手に取れるような形で配布できるかなと思った。小学生はまだ冊子などを読むのが大変だと思うので、学校でケーススタディーのような形で実践的に行うことで、正しく障害を理解できる気がする。  ・様々な人に、まず情報を手に取ってもらえて、具体的な支援策を少しでも知識として残してもらえるような啓発活動が必要だと感じた。 |

|  |
| --- |
| 堤和文委員（公募委員） |
| ・以前、理解に関することについて、各論にしたらどうかということをお話しさせていただいたかと思うが、このような形にしていただいてありがとうございます。  ・私が障害者に対して知識があるかというと、視覚障害の方とか高次脳機能障害の方などに関しては、まだまだ理解がないと思っている。ましてや一般の方はもっと理解しづらいのだろうと思っている。なので、私はやっぱりきっかけとしては、ヘルプマークを推進して、そこに力点を置いていただいて、ヘルプマークをもっともっと理解してもらって、その上で「私が何をできますか」と一般の方から言ってもらえるような、敷居を下げる言葉を使っていただけるような促し方がいいと思っている。  ・私は知的障害の方が全く理解できていなくて、何にもしてあげられることがなくて、例えば、街中で大きな声で何か話されていたりとか、壁に向いて何かやっているなというんですけど、どういうふうに手助けしてあげるかというのは全く分からない。なので、「何かしてあげられることはないですか」という言葉の敷居を下げることの啓発が大事かなと思っている。  ・障害者のほうも情報を取りに行くことが大事だと思っている。私はとりあえず買い物もできるし、車椅子でも動くことができる。例えば食事するときに、バリアフリーの食事するところはどこにあるんだろうと自分で調べる。調べることも民間のソフトウェアを使う。そういう広報もできたらいいかなと思っている。障害者のほうからも、そういうことができたらなと思っている。 |

**（２）推進体制の見直しについて**

　第４回計画策定委員会において、すでに事務局から説明させていただいておりますが、委員の皆様からいただいたご意見や「障害や障害のある人への理解」に関する調査の結果を踏まえ、以下のように推進体制の文章を見直します。

※見直し箇所：下表最終段落の下線部

【見直し後の案】

|  |
| --- |
| 2 理解の促進、広報・啓発活動の推進  「障害の有無にかかわらず、自分らしく、地域で共に暮らせる社会の実現」を目指すためには、すべての市民が、障害及び障害のある人についての正しい理解と認識を持つことが重要です。  そのためには、さまざまな機会をとらえて、身体障害、知的障害、精神障害、発達障害、難病、高次脳機能障害等の障害特性や、外見からはわかりにくい障害についての正しい理解や認識のための広報・啓発を行うとともに、子供のころから障害のある人とない人との交流などを促進していくことが必要となります。  障害者基本法に定められた障害者週間記念事業の実施を中心に、一般市民、ボランティア団体、障害福祉団体など幅広い層の参加による啓発活動を推進します。**また、障害のある人本人や支援者による活動を推進するため、障害福祉団体などが行う理解啓発活動に対し、市が積極的に支援を行います。** |